住民なき土地と「希望の芽」

津野神社横の石碑。「津波によりこの地域の二五世帯の全家屋等が流失、一人の命が奪われた。更に、その後起きた福島第一原子力発電所の事故により、楢葉町全町民が町外へ避難せざるを得ない事態となった（中略）『ふるさとを失った……』」との記述がある。

2025年1月、Jヴィレッジを出発した。この日はトレイルを外れ、まず山田浜へ向かう。木戸川までは広い平野が続き、視界を遮るものがほとんどない。

その平野の海岸近くに、再建された津之神社がひっそりとたたずんでいる。社殿の脇には、この地域から他所へ移住せざるを得なかった人々の思いを刻んだ石碑が建てられていた。住み慣れた土地を離れる無念さが伝わってきて、思わず目頭が熱くなった。

富岡町にある「東京電力廃炉資料館」

さらに北上し、現在稼働を停止している福島第二原子力発電所の西側を過ぎると、富岡町の中心部に入る。町には空き地が目立ち、銀行や信用組合の建物も閉ざされたまま廃屋のようになっている。

一方で、町を元気づけようという動きもある。JR富岡駅近くには、地元有志による「とみおかワイナリー」がもうすぐオープンする予定だという。小さな希望の芽が、確かに育ち始めている。

（この後、25年5月にオープンした）

町内にある東京電力の「廃炉資料館」にも立ち寄った。見学は予約制である。館内では、原子力発電の仕組みから事故の概要、原因、過失の連鎖、そして反省と今後の決意までが、順を追って分かりやすく展示されている。

溶融した核燃料デブリの模型もあり、事故の深刻さを改めて実感する。昨年（2024年）11月には、デブリの試験的取り出しに成功したという報道があったが、その量はごくわずかで、本格的な取り出しは2037年以降とされている。廃炉への道のりの長さを思わずにはいられない。

富岡から内陸へ進み、夜の森の桜並木に出る。今は冬枯れだが、春になれば見事な景観となるだろう。しかしこの周囲には家屋が少なく、空き地が目立つ。かつて田畑だった場所には、電力会社の太陽光パネルが整然と並んでいる。静まり返った風景には、言葉にしがたい寂しさが漂う。

さらに西へ進むと大熊町役場周辺に至る。温泉宿泊施設や福祉施設、飲食店が集まり、その一角に「希望の灯り」が建てられていた。神戸の「一・一七希望の灯り」から分けられた火だという。その石碑の向かいには、冬桜が青空に映えて咲いていた。（元海上保安庁長官・佐藤雄二、写真も）

＝つづく